

題材「つながりのある世界」の題材論的研究

Research on the Thematic Approach via the Theme “The Connecting World”

立原慶一

題材論的方法とは知性的題材に動機づけられた形で行う、想像画的制作法の謂いであるが、その種の絵画制作の社会的意義を新たに問うために、最近、目覚ましい成果をあげている絵画療法的行為との関係に着目する。両者の共通性と相違性を析出しつつ、その関連構造の究明が課題とされる。そうした視点から、「癒し」的な側面が内在されているような、題材をいくつか思いめぐらしてみた。

元来、絵画制作には癒しや浄化としての意味が含まれ、それこそが共通点であると指摘することができる。その事情も踏まえて熟慮した結果、「つながりのある世界」を改めて題材に考案・設定し、平成13年度認定講習で現職教員40名を対象として実践してみる。そのことによって、「絵画療法」と「題材論的方法」の美術的特質及び教育的作用の関係が、構造的に解明されることを目論んだ。

絵画療法とは、非行少年や不登校児童・生徒、神経症患者に見られるような心の均衡が失われた者に対し、ストレスに関わる課題（これは題材論研究の文脈では「題材」に相当する）をまず与える。そして自然発生的で恣意的な制作態度に基づいて家族、社会、学校における人間関係に由来する心理的葛藤や心的外傷体験（トラウマ）、特定の生育歴（社会化の過程）をあらわにさせるのである。それに気づかせることによって鬱積した感情を浄化し、心的な秩序を安定化する方向へ筋道づけることが、描画活動とその言語的把握で行われている。

それに対して題材論的方法では、主題が精神的・道徳的に努力することによって発想され、ついで効果的な表現方法の構想を練るなど創意・工夫が働かされる。その結果、画面に首尾良く実現された主題形成（主題表現に成功し、作品から感じとられるべきもの）を見つめることで、真実なるものや自己の新しい方向が見えてくる事態を期待させる。かくて制作者に、これまでの経験を組み替えさせ手応えのある日常をもたらすなど、結果的に今後における精神と生活を刷新させることが明らかとなった。それは実践的な有効性を発揮し得たと見られる。これが癒しと浄化を専らとする絵画療法と大きく異なる点で、題材論的方法についてはそれに基礎づけられる知性的美術教育の社会的な意味であることが判明した。